

# 創発性から“多様実現性”へ： 「社会と個人」の新しい関係性を構想する ——「スーパーヴィーニエンス」と「諒解」を手掛かりに——

池 田 太 臣

## From Emergence to Diversity Realization: Reconceptualizing the relationship between the social and the individual

IKEDA Taishin

**Abstract** : This paper offers a new concept of the relationship between the social and the individual. In so doing, I refer to two concepts : “supervenience” in philosophy of mind, and Max Weber’s “Einkverständnis (consent).”

First, I examine “supervenience” and “multiple realization”, which have been contested ideas for a long time in the field of philosophy of mind. Second, I show that the concept of “multiple realization” is founded in Weber’s action theory.

In conclusion, I suggest that a new concept, “diversity realization”, might be used in place of the extant idea of “emergence.” The term expresses the idea that social roles and shared values can be realized by a heterogeneous number of different people.

**Key Words** : supervenience, multiple realization, Einkverständnis

**要旨**：本稿の目的は、社会と個人との関係を新たに構想するための手掛かりを提示することにある。その際に参考とするのは、「スーパーヴィーニエンス」およびマックス・ウェーバーの「諒解」概念である。

本稿では、まず「心の哲学」の領域で長年議論されてきたスーパーヴィーニエンス概念および多重実現の概念が検討される。続いて、「多重実現可能性」の着想が、マックス・ウェーバーの行為理論（とくに諒解概念）に見いだされることを示す。そして最後に、従来の「創発性」という言葉に代えて、社会と個人との関係性を“多様実現性”という言葉を使うことが提案される。

**キーワード**：スーパーヴィーニエンス、多重実現性、諒解

## は じ め に

本稿の目的は、社会と個人との関係を新たに構想するための手掛かりを提示することにある。その際に参考とするのは、「スーパーヴィーニエンス」およびマックス・ウェーバーの「諒解」概念である。結論として、創発性から“多様実現可能性”へと社会学における「社会と個人」との関係を変えることを提示する。

社会科学における社会的なものと個人的なものとの関係は、非常に大まかに、還元主義（Reductionism）と創発主義（Emergentism）にわけられる（Little 2015 : 126-127）。還元主義とは、社会的な現象ないしその特性は、構

成員たる諸個人の行為や態度、諸特性に由来するという立場である。そして、優れた科学的理論ないし説明は、この「由来」がどのように働いているのかを示すことによって進められるとする。他方、創発主義とは、社会的な特性は、下位に存在する実体の属性に還元できないとする立場である。

社会学の立場は、どちらかといえば創発主義をとってきたといえるだろう。ダニエル・リトルが指摘するように「社会的に構成され、加えて社会的に条件づけられた個人の思考や行為によって社会現象は構成されている」とみるのが、社会学の特徴だからである (Little 2014: 55)。

本稿は、従来の創発主義（もちろん還元主義も）に満足することなく、社会と個人との新たな関係性を構想するものである。

まず第 1 節では、スーパーヴィーニエンスおよびそれにかかわる多重実現の概念を紹介する。そして、第 2 節では、マックス・ウェーバーの行為論の議論の中に、多重実現の発想があることを指摘する。第 3 節は、同じくウェーバーの「諒解」概念に注目し、そこにも多重実現の発想があることを指摘する。そして最後に、本稿での主張のまとめと残された課題について書いておきたい。ここで、社会と個人と新しい関係性を“多様実現性”という言葉で言い換えることが提案される。

## 1 スーパーヴィーニエンスと多重実現

社会と個人との新しい関係性を模索する場合、手掛かりとするのは心の哲学の領域で長らく議論されているスーパーヴィーニエンスおよびそれと関わる多重実現の概念である。そしてもう一つは、マックス・ウェーバーの「諒解」概念である。この第 1 節では、スーパーヴィーニエンスと多重実現の両概念を簡潔に紹介し、それらから得られる着想を述べておきたい。

### 1.1 スーパーヴェーニエンス (SUPERVENIENCE) の定義と由来

スーパーヴィーニエンスの概念は、以下のように定義される (McLaughlin and Bennett 2014)。

以下のような場合に、一セットの属性 A は他の属性 B にスーパーヴィーン (supervene) する。すなわち、いかなる 2 つの事物も、B 属性の違いなしに A 属性の違いがあり得ない場合である。スローガンの言えば、“B の違いなくして A の違いはありえない”である。

このスーパーヴィーニエンスは、「心の哲学 (philosophy of mind)」上の問題に関連して提起された概念である。その「心の哲学」上の問いは、以下のような問いである (List & Spiekermann 2013: 632)。まず、“物質的なシステムとしての有機体や脳の状態を観察して得られる物理的現象”と“心理学的な言語で記述される心理的状态 (信念、欲求、意図 etc.)”との関係とは、どのようなものであるかという問いである。さらに、その中でも中心的な問いは、ある人の心理的状态は、彼／彼女の脳や身体の状態とどのようにかかわっているのかである。そして、身体における物理的プロセスは、どのように意識や一人称的体験のようなより高次のレベルの現象を引き起こすのか、である。

こうした問いに対して、スーパーヴィーニエンスは、心理的現象の物理的現象への依存を定式化する概念として主張されたものである。ただ、こうした「心の哲学」上の問いとそれに対する回答はかなりの蓄積があり、ここでそれらすべての歴史を追うことはできない。本稿では、その着想だけを借りて、社会と個人との関係を考える際の手掛かりとしたい<sup>1)</sup>。

### 1.2 社会科学におけるスーパーヴィーニエンス

この心理的現象と脳や身体の状態との関係についての定式化であるスーパーヴィーニエンスは、「上位レベル (A) の実体および構造と下位レベル (B) の実体および構造との関係についての形而上学的な理論」と広くとらえなおすことができる (Little 2015: 125)。そして、「心理的 psychological, mental」を「社会的 social」に、「物質的 physical」を「個人的 individual」に置き換えれば、この問いは社会科学の問いに変換できる。

ジュリー・サーレによれば、還元の議論において最も重要な展開は、スーパーヴィーニエンスの導入と多重実現（multiple realization）からの議論の進展であると述べている（Zahle 2007: 327）。1980年代において、スーパーヴィーニエンスの観念は、個人主義／全体主義論争の中に現れ始めたという（Zahle 2007: 327）。

社会科学におけるスーパーヴィーニエンスは、どのようなものであろうか。例えば、サーレは、以下のように定義する（Zahle 2007: 327）。

社会的諸実体・それらの諸特性・行為などは、以下のような限りで、諸個人・それらの行為などにスーパーヴィーンしているといつてよい。(1) 社会的全体・それらの特性・行為などのレベルでの違いは、諸個人・それらの特性・行為などのレベルの違いがない限り、ありえない。(2) 諸個人、それらの行為などは、いかなる種類の社会的全体・その特性が具現化されるか（are instantiated）を固定する（fix），あるいは規定する（determine）。

サーレによれば、スーパーヴィーニエンスは存在論的依存の關係に言及したものであるという（Zahle 2007: 327）。先に紹介したスーパーヴィーニエンスの定義からも、それは明らかであろう。そもそもスーパーヴィーニエンスは、心理的現象の物理的現象への依存を定式化したものだからである。それゆえ、リトルがいうように、「スーパーヴィーニエンスはわれわれが探求すべき關係ではない、という結論に達することは避けられない」だろう（Little 2015: 141）。なぜならば、「本質的に、社会と個人との一致した關係であることには変わりがない」からである。この概念を受け入れるならば、「真に社会的なものを探求することを禁じる」ことになる。つまりリトルによれば、スーパーヴィーニエンスの概念は“社会的なもの”を“個人的なもの”へと還元することになる。

他方で、別の評価も存在する。キース・ソーヤー（Sawyer 2002; 2003）の「非還元的個人主義 non-reductive individualism」<sup>2)</sup>がまさにそれに当てはまる。

ソーヤーによれば、スーパーヴィーニエンスは、個人のみが存在することを認めるが、方法論的個人主義を拒否するという。つまり、社会現象を個人に還元することなく扱うことを正当化する。

なぜならば、スーパーヴィーニエンスは非対称な關係だからである（Sawyer 2002: 543）。ある一定の社会的属性は、おそらく、異なった状況下で、多重に（multiple）さまざまな一群の個人の属性に、スーパーヴィーンする。しかし逆はあり得ない。ある一群の個人の属性は、すべての状況下で、同じ社会的属性を実現する（realize）。

私は、ここでソーヤーが述べている多重実現（multiple realization）ないし多重実現可能性（multiple realizability）に注目したい。ソーヤーによれば「スーパーヴィーニエンスと多重実現は2つの異なった言説の伝統<sup>3)</sup>として進んできたが、大部分の哲学者たちはこれらの2つの議論は互換性があることに同意している」（Sawyer 2002: 542, 注釈は池田）。スーパーヴィーニエンスの議論と多重実現の考えたは、分かちがたく結びついているのである<sup>4)</sup>。

### 1.3 スーパーヴィーニエンスおよび多重実現の議論からの示唆

この多重実現という考え方から、つぎのような着想を得ることができる。すなわち、社会的なものと個人的なものとは、「分離」されているのではない。前者は後者によって多重に実現されている（multiply realized）のである<sup>5)</sup>。この発想より、社会的なものを個人的なものから分離する「創発性」という考え方を相対化し、社会的なものは個人的なものによって「多重実現」されている（「多重実現可能性」がある）ととらえる道が開かれる。

そこで次に、社会学の議論の中に「多重実現可能性」を探ってみることが必要になる。実は、似たようなアイデアを社会学の古典的理論家・マックス・ウェーバーの「行為」や「諒解」概念の中にも見出すことができる。この点を次章で検討していきたい。

## 2 ウェーバーにおける多重実現の議論

### 2.1 方法論的個人主義者・ウェーバー

さて、一般に、マックス・ウェーバーの社会学的方法は、方法論的個人主義と呼ばれる (Udehn 2001 : 95-103 ; Udehn 2002 : 485)。その根拠として、まずは彼自身の手紙が挙げられる。

社会学はまた、ひとりのあるいはそれ以上の、幾人かのあるいは多数の個人の行為から進めることによって実行されてのみ可能です。そのことは、厳密に『個人主義的 individulist』方法を使うことを意味します。(Roth 1976 : 306)

さらに、彼の掲げた「理解社会学」からの当然の帰結としても支持される。彼によって、意味理解のための個人の行為の優位性が指摘されているからである。

考察の目標が「理解すること」にあることが、詰まるところ、(われわれがいうところの)理解社会学が個々の個人とその行為を最小の単位として—それ自体疑わしい比喩がここでいったん許容されるとすれば—「原子」として扱う理由である。(Weber [1913] 1988 : 439 = 1990 : 37, 傍点部は池田)

したがって、ウェーバーは、集合的人格概念を拒否する。

しかし同じ理由から、この考察方法にとっては、個人は上に向かっても限界をなすのであり、意味を持った行為の唯一の担い手となる。一見そうとはとは見えないような表現が用いられても、このことを見失ってはならない。〔中略〕「国家」や「仲間団体」や「封建制」などの概念は、社会学にとっては一般的に言って、人間の特定の種類の共同行為のカテゴリーを表現しているものであり、だからこそそうしたカテゴリーを「理解可能な」行為へと、すなわちとりもなおさず参与している個々人の行為へと還元することは社会学の課題なのである。(Weber [1913] 1988 : 439 = 1990 : 38)

このようにみえてくると、ウェーバーの理解の方法は、還元論的な個人主義のようにみえる。しかし、それには限定が必要である。彼が個人を重視するのは、“理解可能な意味の唯一の担い手”<sup>6)</sup>という理由からである。決して、個人に還元するという意味での、還元主義ではない。

### 2.2 行為の多重実現可能性～“行為は心理的なものに関わっている”

ウェーバーは、“理解可能な意味の唯一の担い手”という意味で行為に注目した。しかし、その場合の「意味」は、決して“心理的”なものではない。

意味関係が同一であっても、その場合に作用している「心理的」布置連関が同じだとは限らない。もちろん、一方における差異が他方における差異を規定することもあるのは確かである。しかしたとえば、「利潤追求」といったカテゴリーそのものは、およそ「心理学」に属するものではない。なぜなら、ある「同一の」営利企業が二代の所有者にわたって「収益性」を求めて「同一の」努力をしているとしても、二人の所有者は全く異質の「性格」の持ち主であることもありうるのみならず、その努力がまさに全く同一の経過をたどり、全く同一の最終結果に到達したとしても、それに、結局はまさに正反対の「心理的」布置連関や性格が直接に作用していることがありうるからである。(Weber [1913] 1988 : 430 = 1990 : 15, 傍点部は池田)

この個所でのウェーバーの説明は、非常に興味深い。というのも、まさに多重実現的な発想が見られるからである。「利潤追求」という社会的行為は、「異質の『性格』の持ち主」によって追及される。あるいは「正反対の

『心理的』布置連関」が作用していることがありうる。同じ行為は、さまざまな「異質の『性格』の持ち主」や「正反対の『心理的』布置連関」によって実現されるのである。

これまでの説明より、ウェーバーの立場がはっきりする。ウェーバーは、意味理解の最小単位という意味で“個人主義的立場”である。ウェーバーによれば、個人の行為は“意味分有の限界単位”という意味で、それ以上分割不可能な最小単位なのである。しかし、他方で、それは個人の「心理」や「性格」などに還元できない非還元論の立場である。ウェーバーは、観察対象としての行為を置くという意味で“個人主義”だが、その意味の由来に関しては、個人の「心理」や「性格」に還元することはない。そこには、多重実現の発想があったことがみてとれる。

### 3 “日常世界の諒解化”と多重実現可能性

ウェーバーの多重実現的考え方は、他の個所でも確認される。それは、彼の「諒解」概念と大きくかかわっている。

#### 3.1 諒解の定義

まず、ウェーバーの「諒解」<sup>7)</sup>概念について説明しておこう。彼の定義は以下のとおりである<sup>8)</sup>。

諒解 (Einverständnis) という概念をもって、われわれは次のような事態を理解することにしよう。その事態とは、他の人々の行動について予想を立てそれに準拠して行為すれば、その予想通りになってゆく可能性が次の理由から経験的に「妥当」しているということであり、その理由は、当の他の人々がかの予想を、協定が存在しないにもかかわらず、自分の行動にとって意味上「妥当なもの」として実際に扱うであろうという蓋然性が客観的に存在している、ということである。いかなる動機からして他の人々のこの行動を予想することが許されるのか、ということは、概念上どうでもよい。(Weber [1913] 1988: 456=1990: 85-86, 傍点部は池田)

つまり、明示的な合意や取り決め（協定）がないにもかかわらず、あたかもそれがあるかのように人々がふるまい、また他の人々の行動をそれに基づいて予想することが可能な状況を指している。そして、最後の傍点部にあるように「他の人々がこの行動をいかなる動機から予想するのか」は、問題にならない。つまり、諒解も多重実現性を持つのである。さらに他の個所で、ウェーバーは、次のように述べている。

目的合理的に理解しうるものであれ、あるいは「心理学的にのみ」理解しうるものであれ、全くさまざまな主観的動機や目的や「内的状態」が相まって、主観的な意味関係の点では等しいゲマインシャフト行為を生み出し、また同様に経験的妥当の点では等しい「諒解」を生み出すこともある。(Weber [1913] 1988: 460=1990: 95)

この引用部にもあるように、「さまざまな主観的動機や目的や『内的状態』」が相まって、「等しい『諒解』を生み出す」可能性がある。ここにも多重実現的な発想が見られる。

筆者の見立てでは、諒解概念は、“一人称”的説明で解釈する際に、主観的な意味という観点から記述できない前提や規則性を言い表した概念である。つまり諒解は、秩序は“主観的な意味による記述”に還元できないことを示している。このことは、ウェーバーの非還元論の立場を明確に示している。諒解に則る行為は、動機的には多様なのである。

#### 3.2 合理化の帰結としての“日常世界の諒解化”

ウェーバーによれば、合理化とは、諒解行為の目的合理的秩序による「置換」を意味している。

しかし全体的には、われわれが見通しうる歴史的発展の経過において、たしかに諒解行為のゲゼルシャフト関係による「置換」を一義的に認めることはできないとしても、諒解行為が制定律によってますます包括的かつ目的合理的に秩序付けられることや、また特に、団体が目的合理的に秩序づけられたアンシュタルトへとますます変化することを確認することはできる。(Weber [1913] 1988: 470-471 = 1990: 120)

しかしながら他方で、ウェーバーは次のようにも述べている。

人々の行動は、その諒解の主観的な構造に即してみれば、しばしば圧倒的と言ってもよいほど、意味とのかかわりを全く持たない多かれ少なかれほぼ一様な大衆的行為の形をとる。このように、社会の分化と合理化との進展が意味するのは－必ずいつもというわけではないとしても、結果においては全く通常の場合－合理的な技術や秩序に実際にかかわる人々が、その技術や秩序の合理的な基礎から全体としてみればますます引き離されていくということであって、彼らには総じて、「未開人」に呪術師の呪術的手続きの意味が隠されているのと同じように、その合理的基礎が隠されているのが常である。したがって、ゲマインシャフト行為の諸条件や諸連関についての知識の普遍化が、当の行為の合理化をもたらすというわけでは決してない。〔中略〕「未開人」は、自分自身の生活の経済的・社会的諸条件については、ふつうの意味での「文明人」よりもはるかに多くのことを知っている。しかもその場合、「未開人」の行為と比較して、「文明人」の行為の方が終始主観的に目的合理的に経過するかということは、むしろ行為の個々の領域によって異なっているのであって、それはそれとして独立の問題である。(Weber [1913] 1988: 473 = 1990: 125, [ ] 内および傍点部は池田)

つまり、「合理化」は、他方で、行為の平面においてますます「諒解」の領域が増えていくことを意味しているのである。この事態を“日常世界の諒解化”と呼んでおこう。

### 3.3 ウェーバーの方法論との齟齬

ウェーバーは、合理化の過程として諒解行為の目的合理的秩序による「置換」を指摘する。他方で、人々の行動は「意味とのかかわりを全く持たない多かれ少なかれほぼ一様な大衆的行為」の形をとるともいう。この2つの一見矛盾する指摘から何がわかるだろうか。それは、ウェーバーは、行為レベルと“行為のプラットフォーム”のレベルを区別していることを示している。

合理化はプラットフォームの変化であり、行為レベルでは同時に“諒解化”が生じる。日常生活とは、プラットフォームが“剥き出し”にならずに“諒解化”したうえで構築される相互作用のことである。

行為がますますプラットフォームに無自覚に行われるようになる(諒解化)とすれば、個人の行為の意味づけを理解することに、どれほどの有効性があるのだろうか。行為の経過は、プラットフォームへのはっきりとした意識的準拠を伴わないとするならば、その行為者の意味づけを明らかにしたところで、わかることはほとんどないのではないだろうか。むしろ、研究者が行うべきことは、いわゆる行為者の意味づけを超えて、その背後にある諒解領域を“顕在化”させることにあるだろう。その場合、すくなくとも“個人の主観的な意味づけを理解する”という方法(=「理解社会学」)は、手掛かりにはなるが、最終的な説明の意義は持たない。ここに、ウェーバーの方法論と“日常世界の諒解化”との間の齟齬をみてとることができる。

### 3.4 新しい解釈の可能性

おそらく、素直に解釈すれば、ウェーバーの理解の方法の対象は、“諒解化したプラットフォーム”内での行為の理解に限られる。つまり、諒解という“秩序めいた土台”の上に展開される、行為の経過・規則性の「一人称」的説明に限定されている。ここから“秩序－(諒解)－理解によって説明可能な行為”という三者の関係を考えることができる。こう考えると、諒解は根底にある秩序と行為との間をつなぐ概念ととらえ返すことができる<sup>9)</sup>。そして、諒解もまた、秩序と多様な行為の在り方をつないでいる。その意味で、多重実現可能性を示唆している。

まとめておけば、ウェーバーにおける多重実現可能性は、2つの段階で見いだされる。わかりやすく箇条書き

にしておけば、次の2つの段階である（文末の図も参照のこと）。

（1）様々な動機、内的状態→〈多重実現〉→行為

（2）様々な行為→〈多重実現〉→諒解化した秩序

まず、（1）のレベルは、行為のさまざまな動機や内的状態による多重実現性である。ウェーバーの議論を紹介しつつ述べたように、行為はさまざまな動機によって遂行される。（2）が第二のレベルである。諒解化した秩序は、さまざまな行為のプラットフォームになることを表している。つまり、諒解化した秩序は、様々な行為によって多重に実現されるのである。これもウェーバーの諒解の議論から導き出すことができた。

このようにウェーバーの社会学的知見の中に、多重実現の発想を見て取ることができた。最後に、多重実現の発想から、社会と個人との関係をどのように新しく構想できるかを示しておきたい。

#### 4 結論：多重実現可能性、さらに「多様実現可能性」へ

心の哲学の議論からスーパーヴィーニエンスを、ウェーバーの議論から諒解を取り出した。そして、2つの議論を結ぶキーワードとして、多重実現可能性を強調した。今後は、多重実現可能性を組み入れつつ、社会と個人との新しい関係性の構想を練る必要がある。そうでなければ、スーパーヴィーニエンスも諒解も、単に創発性を正当化するだけになる。そうならないためには、「社会的なもの」は「多様な個人の在り方に開かれていること」に依存する、ないしはその状態を必要とするという形で、社会と個人との関係を構想することが必要であろう。

“ひとつの社会的な役割にしても、異なったバックグラウンドをもった諸個人によって担われることにより（＝多重実現されることにより）、ズレと差異がもたらされる”ことは単純にいえそうである（cf Little 2014: 59, 63）。多重実現可能性の高さが、個人の即興の起こる確率を上げて、新たな行動スタイルを生む確率を上げる。すなわち多重実現可能性は、社会的なものの「多様実現可能性」につながると考えられる。

こう考えれば、創発性よりも多重実現可能性の方が、“社会的なものの変容”ないし“個人が社会（ソーシャル）をハックする可能性”<sup>10)</sup>を考えやすいのではないだろうか。社会と個人との関係は、創発性ではなく、“多様実現可能性”によって置き換えられる必要があると主張しておきたい<sup>11)</sup>。

#### 5 おわりに～社会像をデザインする仕事としての社会学

今回の議論は、いってみれば“スーパーヴィーニエンス（多重実現可能性）+ウェーバー”という議論だったが、まだ表面的に過ぎる感は否めない。スーパーヴィーニエンスや多重実現可能性の議論に関する理解をより深め、ウェーバーないし社会学とのより創造的な結びつきを模索したい。

また、多重実現可能性は、他の古典的社会学者の G・ジンメルや E・デュルケムの議論からも取り出すことができるように思われる。その点も追及していきたい。

それから、社会科学の中でスーパーヴィーニエンスに関する議論も数多くある。これらを整理する必要もある<sup>12)</sup>。他方で、ヴォルフガング・シュルフターも、ウェーバーのリサーチプログラムに準拠しながら、方法論的個人主義と全体主義の克服を目指している（Schluchter 2015）。こうした先行研究の詳細な検討も今後の課題である。

最後に、本論文の動機となった私の個人的な考えも書いておきたい。それは、社会学の課題に関わるものである。

シンプルな道具立てで現象を説明し、できる限り予測に役立てる。このことが社会科学の本来の課題だろう。しかし他方で、“（現代）社会は、そもそもどのようにとらえられるか”という、「社会像」の構想もまた、社会学の課題の一つではないかと筆者は考える。つまり、社会学の（「世間に向けての」ということも含む）タスクは、「社会（世界）の見方をデザインすること」だと言える。なぜならば、社会（世界）に対する見方の多様性こそが、社会内の存在の多様性のプラットフォームをなしていると思われるからである。さまざまな「社会（世界）の見方のデザイン」を考え、それ流通させ、結果として多様性を確保する。それが社会学をはじめとする社会科学の任務の一つではないだろうか。

今回のこの論考の根本的な動機は、私個人のこうした考えにもある。この考えが、どれだけ共有されるかはわからない。しかし、本稿で示したささやかな着想が新しい見方のデザインにつながるよう、今後も努力していきたい。

### 注

- 1) スーパーヴィーニエンスの概念史については、ブライアン・マクラフリンとカレン・ベネットとの整理を参照のこと (McLaughlin and Bennett 2014)。
- 2) クリスチャン・リストとカイ・スピーカーマンは「ソーヤーは、心の哲学から社会科学の哲学への重要なアイディアの包括的翻訳に取り組んだ最初の人物である」と評価している (List & Spiekermann 2013: 628)。
- 3) 心の哲学における「多重実現」ないし「多重実現可能性」の議論については、美濃正による説明が参考になる (美濃 2004: 32-36)。
- 4) ベトリ・ウリコスキによるスーパーヴィーニエンスの定義は、多重実現の考え方を組み込んだものになっている。それは、以下のとおりである (Ylikoski 2014: 7)。  
上位の属性は下位の属性によって多重に実現される。しかし、いったん下位レベルの特性が固定されたら、上位レベルの属性も固定される。
- 5) アンドリュー・ライトらの具体的な説明を紹介しておこう (Wright, Andrew and Sober 1992: 119-20)。以下は池田による要約である。

たとえば、「資本主義的な諸社会→経済成長への傾向を持つ」という現象があったとしよう。この社会的特質は、資本主義的マーケットの競争の性格の帰結としてとらえられる。なぜならば、競争によってイノベーションと継続的な投資が行われ、結果として蓄積的な成長を生むからである。

この過程は、ひるがえって、各企業のサバイバルによっても説明される。各企業はマーケットにおける利潤を効率的に生もうとする存在である。経済的なサバイバルのさまざまな事例において、特殊な信念や好み、情報、資源をもった諸個人によってなされた一連の決断を特定できるだろう。しかし、その A 企業と B 企業を生き残らせた要因は、違うかもしれない。A 企業は労働者の受動性 (抵抗することなく改革を受け入れるなど) の理由かもしれない。B 企業はオーナーの無慈悲さによるかもしれない。C 企業は、マネージメントの科学的な合理性によるかもしれない。

競争的な市場関係というマクロプロセスの観点から社会レベルの成長の説明は、それゆえ、たくさんの可能なミクロメカニズムによって実現されるのである。

- 6) ウェーバーのこの捉え方に立てば、社会的行為は必ずしも人間の持つ有機的神経システムや心的システムを必要としない。なぜならば、知識体系とコミュニケーションのノウハウを人間とそん色なく学んだ人工知能でも、「意味」を担い、コミュニケーションを成り立たせるからである。人間と人工知能が全く同じ能力を持った時、社会は心的システムにも有機体にも依存しなくなる。こう考えると、社会の多重実現可能性もわかりやすい。

そうなれば、ルーマンのいうところの社会システムと心的システムの構造的カップリングも見直しが必要となるかもしれない (Luhmann 2013: 200=2007: 339)。心的システムでなくとも、コミュニケーションは成り立つからである。社会システムは、もっと多重に実現されるのである。

ただ、仮に本当にそのような人工知能が実現された場合、その種の知能と人間とのコミュニケーションを「社会」と呼んでいいのだろうか。その種の人工知能の「行為」を「(社会的) 行為」と呼んでいいのだろうか。これらのことは、ひとつの大きな問題であろう。もし、「社会的」と呼べないのであれば、社会の構成単位に「有機体」「心的システム」などが必要不可欠の要素であったことが露呈する。いずれにせよ、意味を分有し、世界を自ら意味付ける人間以外の存在を社会学内でいかに考えるかは、興味深い問題である。

- 7) ウェーバーにおける諒解概念の位置づけは、橋本直人の論文を参照のこと (橋本 2015)。
- 8) この定義も難解だが、橋本による解説がわかりやすい。少し長くなるが引用しておこう (橋本 2015: 62)。

まず、他者が **b** がこの貨幣を受け取るであろうという予想のもとに、ある人物 **a** が貨幣を使用する (**b** に貨幣を支払う)。そして **b** は実際に貨幣を受け取る、つまり予想通りになる (予想の経験的妥当)。だが、この事態が制定秩序によるのではなく (制定秩序に基づくなら「ゲセルシャフト行為」である)、制定秩序がないにもかかわらず「**b** が貨幣を受け取るだろう」という **a** の予想が、**b** にとって「妥当性のある」ものとして扱われるという蓋然性が客観的に存在する場合、これが諒解である。そして **b** が **a** から貨幣を受け取る動機が、貨幣の呪物的性格ゆえか、単なる慣習からか、市場から排除されるのを避けるためか、「別の他者 **c** が自分 **b** から貨幣を受け取るだろう」という予想したからか、それは「概念上どうでもよい」。

- 9) この考え方は、私だけではない。松井克浩もほぼ同じ考えを展開している (松井 2007: 20)。私見によれば、諒解とは、行為の過程では“意味の外”にある秩序である。つまり、行為者のフレームの外にある秩序という、主観的な認識上の現象である。無数に存在するさまざまな秩序をフレームの外に置くことによって、はじめて当該目的の遂行が可能になる。そのため、秩序の諒解化は、行為遂行のための必要条件といえる。秩序の諒解化とは、要は、“フレーム外し”である。
- 10) ウェーバーの『理解の社会学のカテゴリー』にも、似たような指摘がある。ウェーバーは、秩序かわる人々を 4 つに



- 区分している (Weber [1913] 1988 : 472-473 = 1990 : 124-125)。その中の「第三の人々」によって、合理的秩序は、私的目的にとって必要である限りで、「普通の実施の仕方からはさまざまに隔たりつつ主観的に知られ、(適法的なまたは非適法的な) 行為を方向付ける手段にされる」のである (Weber [1913] 1988 : 472-473 = 1990 : 124)。
- 11) ただこの場合、「実現」という言葉が本当に適切なのかは、まだまだ検討の余地がある。「実現」という言葉は“物理的なイベントが、そのメカニズムは分からないが、とにかく心的イベントを引き起こしている”という事態だからである。
- 12) とりあえず、エプスタイン (Epstein 2014)、リトル (Little 2007; 2014; 2015)、リスト&スピーカーマン (List and Spiekermann 2013)、ウリコスキ (Ylikoski 2014) などを挙げておきたい。

#### 参考文献

- Epstein, Brian, 2014, “What is Individualism in Social Ontology?”. *Ontological Individualism vs. Anchor Individualism*, in : Zahle, Julie and Collin, Finn (eds.), 2014, *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, New York, Dordrecht, London : Springer International Pub, 17-38.
- 橋本直人, 2015, 「マックス・ウェーバーにおける行為論の転換と貨幣論－『経済と社会』改訂に関する一考察－」, 『社会学史研究』37, 59-74.
- Kieser, Werner, 2013, *Methodological Individualism and Holism. Two views, One Purpose*, Munich ; GRIN Publishing.
- Kim, Jegwon, 1984, “Concepts of Supervenience”, in : *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.14 (2), 153-176.
- List, Christian and Spiekermann, Kai, 2013, “Methodological Individualism and Holism in Political Science”, in : *American Political Science Review*, 107(4), 629-643.
- Little, Daniel, 2007, “Levels of the Social”, in : Turner, Stephen, P. and Risjord, Mark, W. (eds.), *Philosophy of Anthropology and Sociology*, Amsterdam : Elsevier, 343-371.
- Little, Daniel, 2014, “Actor-Centered Sociology and the New Pragmatism”, in : *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, New York, Dordrecht, London : Springer International Pub, 55-75.
- Little, Daniel, 2015, “Supervenience and the Social World”, in : *Metodo. International Studies in Phenomenology and Philosophy*, Vol.3(2), 125-145.
- Luhmann, Niklas, 2013, *Introduction to Systems Theory*, Cambridge, UK and Maiden, MA : Polity Press. (=2007, 土方透訳『システム理論入門－ニクラス・ルーマン講義録〈1〉』新曜社)
- Martin, John, 2001, “On the limits of sociological theory”, *Philosophy of the Social Sciences*, vol.31(2), 187-223.
- 松井克浩, 2007, 『ヴェーバー社会理論のダイナミクス「諒解」概念による『経済と社会』の再検討』未来社.
- McLaughlin, Brian and Bennett, Karen, 2014, “Supervenience”, in : Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition), <http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/supervenience/>, 2016.09.03
- 美濃 正, 2004, 「心的因果と物理主義」, 信原幸弘編『シリーズ心の哲学 I 人間編』勁草書房, 25-84.
- Roth, Guenther, 1976, “History and Sociology in the Work of Max Weber”, in : *British Journal of Sociology*, 27(3), 306-318.
- Sawyer, R. Keith, 2002, “Nonreductive Individualism : Part I－Supervenience and Wild Disjunction”, in : *Philosophy of the Social Sciences*, 32(4), 537-559.
- Sawyer, R. Keith, 2003, “Nonreductive individualism part II－social causation”, in : *Philosophy of the Social Sciences*, 33(2) : 203-224.
- Schluchter, Wolfgang, 2015, “The Duality of Structure and Action : Outline for a Weberian Research Programme”, in : *Max Weber Studies*, 15(2), 192-213.
- Tollefsen, Deborah, 2014, “Social Ontology”, in : Cartwright, Nancy & Montuschi, Eleanora (eds.), 2014, *Philosophy of Social Science : A New Introduction*, Oxford : Oxford University Press, 85-101.
- Udehn, Lars, 2001, *Methodological Individualism*, London : Routledge.
- Udehn, Lars, 2002, “The Changing Face of Methodological Individualism”, in : *Annual Review of Sociology*, 28, 479-507.
- Weber, Max, [1913] 1988. “Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie”, in : *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 7 Aufl., Tübingen : J C Mohr, 427-474. (=1990 海老原明夫・中野敏夫訳『理解社会学のカテゴリー』未来社)
- Wright, Erik Olin, Levine, Andrew and Sober, Elliott, 1992 “Marxism and Methodological Individualism”, in : Erik Olin Wright, Andrew Levine & Elliott Sober (eds.), 1992, *Reconstructing Marxism : Essays on Explanation and the Theory of History*, London : Routledge, 107-127.
- Ylikoski, Petri, 2014, “Rethinking Micro-Macro Relations”, in : Zahle, Julie and Collin, Finn (eds.), 2014, *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, New York, Dordrecht, London : Springer International Pub, 117-135.
- Zahle, Julie, 2007, “Holism and Supervenience”, in : Turner, Stephen, P. and Risjord, Mark, W. (eds.), *Philosophy of Anthropology and Sociology*, Amsterdam : Elsevier, 311-341.
- Zahle, Julie and Collin, Finn, 2014, “Introduction”, in : Zahle, Julie and Collin, Finn (eds.), 2014, *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, New York, Dordrecht, London : Springer International Pub, 1-14.

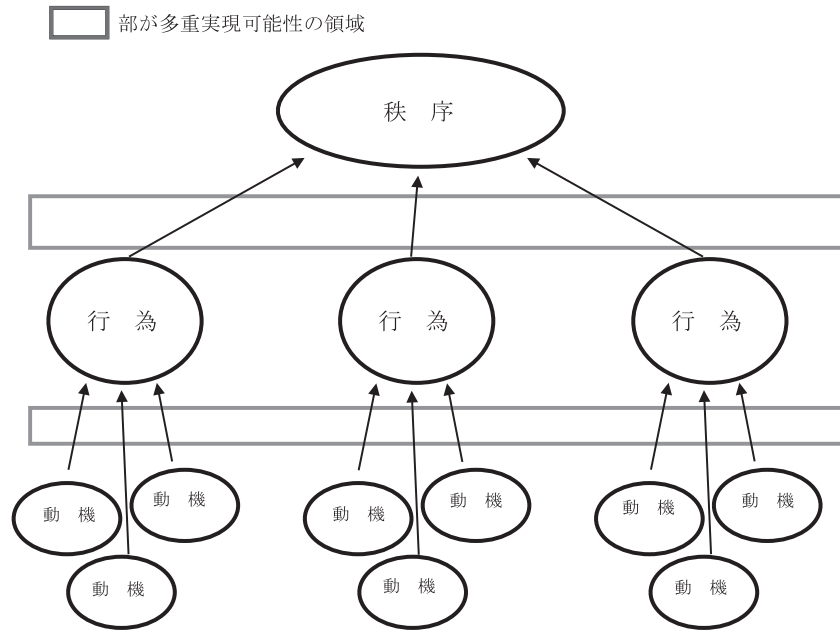


図 ウェーバーの“多重実現可能性”～秩序－行為－動機（の布置連関）